

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

佐々木基裕

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程

【研究題目】

日米仏のアカデミック・ジャーナリズムにおける「現代思想」受容に関する比較教育社会学的研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、アカデミック・ジャーナリズムにおける「現代思想」の受容過程を教育社会学的手法によって明らかにすることである。申請者はこれまで日本におけるフランス「現代思想」の受容過程について、学会誌や思想雑誌の引用分析を中心とした知識社会学的な方法を用いて、その社会的・教育的な機能に関する研究を進めてきた。ただ竹内洋が指摘するように、アカデミック・ジャーナリズム（あるいは「論壇」ないし「批評」）と呼ばれる領域は、アカデミズムとジャーナリズムとの「中間文化」として、日本特異的な文脈のもとに形成されたものである。したがって日本のみを対象としていたこれまでの研究では、アカデミズムとジャーナリズムという界の力学を相対的に把握するには限界があった。本研究では、ポスト構造主義（フランス）、「フレンチ・セオリー」（アメリカ）、「現代思想」（日本）の比較検討を通じて、各国における大学と社会との関係に由来するアカデミック・ジャーナリズムの位相と、そこで形成・受容された「現代思想」の社会的機能を検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、日米仏の「現代思想」の受容過程を包括的に捉えるために、以下の2つのアプローチから比較検討を行った。第一に、「現代思想」受容に中心的な役割を果たした思想雑誌・論壇誌の分析である。第二に、1960年代以降のアカデミック・ジャーナリズムの機能の変化に関する分析である。研究計画に基づき、下記の方法で調査を実施した。

(1) 現代思想雑誌の収集・分析

フランスでは『現代思想』（青土社）が提携していたことでも知られる『アルク』を中心に、『コミュニケーション』、『ランガージュ』、『ポエティック』、『リテラチュール』紙の目次情報を整理した。その上で、関連する論文を収集した。アメリカでは、ソーカル事件の舞台として著名な『セミアテキスト』、『グリフ』、『ディアスポラ』、『バウンダリー2』、『ディアクリティクス』、『サブスタンス』紙を、可能な限り収集した。そのうち、現代思想に関連する論文を抽出し、その論文著者の情報を補完した。

(2) アカデミック・ジャーナリズムにおける「現代思想」の分析

フランスでは『ル・モンド』紙、アメリカでは『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』紙を対象として、現代思想文献を紹介する書評記事を収集した。そこで紹介されている文献の情報、ならびに書評記事執筆者の情報を補完した。

(3) アカデミック・ジャーナリズムの機能に関する文献研究

日本における「ニュー・アカデミズム」に関して、思想雑誌や批評文化の関連がしばしば指摘される。そのようなアカデミック・ジャーナリズムと呼ばれる領域の機能が、特に「現代思想」の受容に関し

てどのような機能を有していたと語られているかを検討する。

【結論・考察】（400字程度）

まず、学会を中心としたアカデミズムとも、商業的価値が優先されるジャーナリズムとも異なる、日本では「批評」や「思想」と呼ばれるアカデミック・ジャーナリズム領域が、アメリカやフランスと比較した場合に特殊な性格を持つことが見えてきた。アメリカやフランスではむしろ、1960年代の学生運動以降、大学と社会との疎隔が繰り返し語られていた。したがって、本研究のような分析を今後行う場合には、日本的なアカデミック・ジャーナリズムという領域の特殊性をまず相対化する必要があると考えられる。

第二に、日本の「現代思想」の場合にはアカデミック・ジャーナリズムにおける受容が先行し、その影響が次第に学会へ波及していくと語られることがあるが、アメリカの「フレンチ・セオリー」の場合には経路が逆である可能性がある。今回の研究で参照できた文献を分析した限りではあるが、アメリカの思想雑誌や書評紙を検討する限り、既に何らかの学会で「ポスト構造主義」は受容済みであるとの認識が見受けられた。

本研究では各国の具体的な分析が中心となったため、執筆者の立ち位置を含めた比較検討が今後の課題である。